

選択的に構成されたそうした「ブリコラージュ」な意味体系は、これまで「明確な規範にもとづく構造化とはほとんど無縁」であるなどとして、「流動的で不安定」であると指摘されてきた(Th. Luckmann)。こうした指摘は、今回の事例にも当てはまるものであろう。

しかし、彼女たちの語りでは、主観的に選択された種々の体系が体験の解釈を中心に構成され、また、語りの全体も不信から確信へという段階的な矛盾のない過程として描かれていた。こうした点に注目すれば、「流動的で不安定」になりがちな彼女たちの意味体系は、体験が核に据えられることによって無限に拡散していくことなく、その一貫性を保持することができていると考えられる。

なによりも彼女たちの語りは、現在の「スピリチュアルカウセンサー」である〈私〉を支える重要な物語なのである。その語りは、変化に富む現代社会の中で、その変化に寄り添いながらも、〈私〉としての同一性を保持していくための戦略を垣間見せてくれるものであると言えるだろう。

「体験の学知」としての近世西欧神秘主義批判

渡辺 優

「神秘主義」をめぐる議論において「経験／体験 experience」という概念が多かれ少なかれ中心的な役割を果たしてきたことに異論はないだろう。個人の特異な宗教的経験は、二十世紀以

降の宗教研究、神秘主義研究の主題であり続けてきた。しかし、神秘主義という概念そのものが近世西欧を起源とする固有の来歴をもつと同様、経験概念のもつ意味も歴史的文化的コンテクストと密接な関わりがある。経験という概念は、まさにその中で「神秘主義 (la mystique)」が成立した西欧近世の認識論的構造変化の中で新たな修辭的意味と権威の源泉としての役割をもつようになった。実際、近世西欧神秘主義はしばしば「体験の学知 (la science expérimentale)」と呼ばれたのである。我々の議論の焦点は十七世紀フランスを代表するイエズス会神秘家ジャン・ジョゼフ・スーラン (Jean-Joseph Surin 一六〇〇―一六五五) にある。彼は有名な「ルダンの悪魔憑き」事件に祓魔師として関わり、自らが悪魔に憑かれてから十七年近くの歳月を半ば「狂人」として送った。恢復後、この長い精神の闇路を通る中で「体験」した悪魔や神のさまざまな働きをその名も『体験の学知 Science expérimentale』(一六六三年)という自伝的テクストにまとめた。この異形の書物は、「超常の体験」に重点を置く後の神秘主義理解を大きく規定したとも言われる。

しかし、これまでほとんど論じられてこなかったが、『体験の学知』の序文をみても明らかのように、スーランは神秘に至る道には聖人など少数の人々へのみ認められた特権的な「体験」のみならず、一般のキリスト教徒に開かれた「信仰」という道があると言っている。そればかりか、体験も最後には信仰に帰着するとして信仰の優越を説いているのである。彼のいわば「信仰の神秘主義」を現代の我々がよく理解しようと試みる

ならば、近世西欧の認識論的構造がどのように変化したか、「経験」概念の変遷を軸として一度概観してみることが有益である。近世に一つの宗教的学知として神学の体系から自律しつつあった神秘主義の学知は、スコラの学知との対立を通じて自らの輪郭を獲得したともいえるが、「経験」は最大の争点の一つであった。スコラの学知の一般性に対して、神秘主義の学知の基盤である経験の個別性を擁護したスュランだが、背景には十六、十七世紀に起こった西欧の認識論的構造の転換が認められる。いわゆる科学革命は、自然哲学におけるアリストテレス的な知の秩序の崩壊を意味したが、それには新しい経験概念の構成が決定的であった。すなわち、それまで自然内に生起する事象についての一般的言明であった経験は、十七世紀に特定の状況下の特定の観察者である私の経験＝実験を意味するようになったのである。このことは学知の「確からしさ」を保証する根拠の重心が社会的に付与される信憑性から個人の直接的認識へと移行したことを表してもいる。個別的経験の特権性は歴史の産物なのだ。実際、たとえば中世末期のスコラ神学者ジャン・ジェルソンは、神秘神学が自然哲学と同じく「一般的経験」に基づいていること、それゆえその獲得のためには個別の経験よりもはるかに「信憑性を与える同意」が重要であるとたしかに述べている。学知における「私の経験＝体験」の優勢は十六世紀の「新世界」旅行記にもよくみてとれるが、とりわけ西欧の法における「証言」概念の変質と結びついていた。個人の直接的体験によって獲得された知識をもたらす「目撃証言」が、西欧近世に新しい証言の原理として、信に支えられた倫理的対話

的關係の中でのみ効力をもつ「倫理的証言」にとって代わった。かくして我々は、個別的体験を中心とする近代的神秘主義理解を歴史的に相対化し、「体験の学知」への別の視座——証言論——を示唆した。この視座から、体験と並ぶもう一つの神秘としてスュランが語っている信仰を考えると、何が言えるだろうか？

諸伝統における「宇宙的聖歌・祈り」の 概念をめぐる考察

リアナ・トルファシユ

様々な伝統や歴史上の時代における文献の中に、宗教学者は「宇宙的讃美」と呼び得るような一つの主題を見出す。この「宇宙的讃美」とは、あらゆるものが——自らの本性および、存在論的な階梯の内でも占めている地位に従って、自らが為し得る仕方——神ないし神々を讃美していると考えられる、という概念である。たとえば、天使たちは様々な言葉によって神を讃えていると言われるが、彼らは霊的な存在である限りにおいて、ただ霊的な仕方によってのみそれを為し得る。同様に、様々な動物や植物、鉱物などもまた、それぞれに相応しい仕方でも神を「讃えている」のである。

以下に、宇宙的讃美は具体的にどのように表されているかをよりよく分かるように、その様々な表現の中から幾つかを挙げる。